

平成 19 年度秋の展示「食虫植物の世界－虫を食べる植物たち－」関連シンポジウムの記録

千葉県の食虫植物を語ろう

平成 19 年度秋の展示「食虫植物の世界－虫を食べる植物たち－」の開催に伴い、関連シンポジウムとして「千葉県の食虫植物を語ろう」が平成 19 年 12 月 9 日に千葉県立中央博物館の講堂で開催された。

千葉県はかつて湿生植物が豊富な県として全国に知られていた。特に、九十九里平野は無数の湿地が带状に点在し、多くの食虫植物が生育していた。近年、開発に伴い、生育地のほとんどは失われ、食虫植物は絶滅の危機に瀕している。そのため、残された生育地では、様々な活動が行われている。今回、千葉県における食虫植物の現況とその保護活動について話題を提供し討論した。

プログラム

- 開会の辞 (13:00～13:05) 清 藤 一 順 (千葉県立中央博物館)
館長挨拶 (13:05～13:15) 佐久間 豊 (千葉県立中央博物館)
主旨説明 (13:25～13:55) 古 木 達 郎 (千葉県立中央博物館)
講 演 (13:55～14:55)
1 「千葉県の食虫植物－分類・分布・生態－」
天 野 誠 (千葉県立中央博物館)
2 「成東・東金食虫植物群落と守る会の活動」
川 邊 侃 (成東・東金食虫植物群落を守る会)
3 「長生村湿生植物群落保全活動の経緯と現状」
岩 瀬 徹 (長生村湿地生態調査団)
休 憩 (14:55～15:15)
総合討論 (15:15～16:00)
座長: 古 木 達 郎
コメンテーター: 柴 田 千 晶 (日本歯科大学)
閉会の辞 (16:00) 清 藤 一 順 (千葉県立中央博物館)

講演要旨

千葉県の食虫植物－分類・分布・生態－

天野 誠 (千葉県立中央博物館)

千葉県には、2 科 3 属 11 種の食虫植物が分布していた。これは日本の食虫植物 2 科 4 属 21 種の半分以上に当たる。かつての千葉県は日本有数の食虫植物の宝庫でした。現在では、ムジナモとヒメタヌキモは、絶滅・消息不明であり、残りも保護を要する状態になっている。

過去の報告や標本を見ると多くの産地が挙げられるが、千葉県では産地そのものが消失したり、遷移が進んで食虫植物が絶滅したりしており、今では保護地以外ではほとんど見る事ができない。

海外の分布をみると東アジアから東南アジアを経て南アジア、オーストラリアに分布をするコモウセンゴ

ケ、イシモチソウ、ナガバノイシモチソウ、タヌキモ、ノタヌキモ、ミミカキグサ、ムラサキミミカキグサ、ホザキノミミカキグサや北半球に広く分布するモウセンゴケ、世界各地で記録されているムジナモと世界に広く分布するものが多いが、日本では絶滅危惧状態のものが多い(表 1)。食虫植物は生育環境が限られており、生育地での積極的な保護が必要となっている。

成東・東金食虫植物群落と守る会の活動

川邊 侃 (成東・東金食虫植物群落を守る会)

《成東・東金食虫植物群落概要》

成東・東金食虫植物群落は千葉県の九十九里平野のほぼ中央に位置し、山武市と東金市にまたがり、海岸より約 6.5 km 砂堤列の端にあって作田川に接している。

1920 年に日本で最初の天然記念物指定の一つで、指定理由は「特異な湿生植物、なかでも食虫植物の種

表1 千葉県産の食虫植物とそのレッドデータ・ブックでのランク

和 名	学 名	国のランク	県のランク
モウセンゴケ	<i>Drosera rotundifolia</i> L.	ランク外	要保護生物
コモウセンゴケ	<i>Drosera spatulata</i> Labill.	ランク外	要保護生物
イシモチソウ	<i>Drosera peltata</i> Thunb.	絶滅危惧 II	最重要保護生物
ナガバノイシモチソウ	<i>Drosera indica</i> L.	絶滅危惧 IB	最重要保護生物
ムジナモ	<i>Aldrovanda vesiculosa</i> L.	絶滅危惧 IA	絶滅・消息不明
タヌキモ	<i>Utricularia australis</i> R.Br.	絶滅危惧 II	要保護生物
ノタヌキモ	<i>Utricularia aurea</i> Lour.	ランク外	要保護生物
ヒメタヌキモ	<i>Utricularia minor</i> L.	絶滅危惧 II	絶滅・消息不明
ミミカキグサ	<i>Utricularia bifida</i> L.	ランク外	要保護生物
ムラサキミミカキグサ	<i>Utricularia uliginosa</i> Vahl	絶滅危惧 II	重要保護生物
ホザキノミミカキグサ	<i>Utricularia caerulea</i> L.	ランク外	重要保護生物

類に富み、その種類の多いこと他に類例が無く、現在絶滅に瀕しつつある植物の自生地」ということであった。第2次大戦前後の食料増産の時代に耕地整理と作田川の改修工事もなされ、群落の中を水路が通され、部分的に耕作がなされて指定解除をされたりした。周囲の耕作形態の変化の影響を受け、群落地は乾燥化し、3期に渡って保護増殖調査委員会が組織され調査・対策が取られてきたが、きれいな水による水位の安定は今なおされていない。現在の面積は約3.2haで指定当初の約84%である。

《成東・東金食虫植物群落の特徴》

群落地の特徴は食虫植物の種類の多さで、8種が生育している。また、植物の種類のが350種以上現在も生育していること、そして、環境省レッドリストに記載されている維管束植物が27種、蘚苔類が5種あり、なかでも蘚苔類のオオカギトゴケとモグリゴケは現在、世界中でこの群落だけで生育が確認されている種である。低層湿原があるところは開発されやすく、食虫植物の宝庫と言われた九十九里平野も減少し、広く昔の植生を維持しているところはこの群落くらいである。

《成東・東金食虫植物群落を守る会》

群落での案内ボランティア活動は1987年、地元の若き一女性の提案で成東町教育委員会の賛同で始まった。1993年「成東・東金食虫植物群落を守る会」に組織を再編して、成東町教育委員会の業務に協力する活動を始めた。活動内容は大きく3つに分かれる。案内広報活動、保護活動、調査活動である。

案内広報活動は案内活動をはじめ、写真カードの設

置、夏休み子ども教室の開催、写真展、講演会の実施、「花ごよみ」の作成、ホームページでの紹介などを行っている。

保護活動は守る会の先輩の地元保護団体である「愛土会」と共に、野焼き、セイタカアワダチソウの抜き取り作業、ヨシ・ススキ刈り取り、ススキ株掘り取り作業などを行っている。

調査活動は群落保全のために行われた剥ぎ取り区や攪乱区の植生調査を継続的にを行い、また、保護増殖調査委員会・検討会への参加・協力を行ってきた。

《後世に残そう》

2003年に報告された保護増殖調査報告書の中で「ミュージアムパーク構想」が提起されている。この中で群落地を後世に残すには周囲の環境変化から群落地を守りつつ、かつての湿潤な状態に復元すること。さらに学校教育、社会教育の場、また、地域の観光資源としての活用を目指している。群落の保護は関わる全ての機関と市民の皆様の協力がなければならない。守る会は更なる充実をはかり、この群落地を後世に残す一つの力になるべく努力したい。

長生村湿生植物群落保全活動の経緯と現状

岩瀬 徹（長生村湿地生態調査団）

茂原駅から八積駅にかけての一带は、かつて大ドブと呼ばれた沼沢地や湿地、深田のほか、原野、山林が広がっており、植物愛好家の間で、「茂原・八積湿原」と呼ばれていた。昭和の初期にこの地をしばしば訪れていた牧野富太郎博士は「まさに植物の宝庫である」と絶賛していたことはよく知られている。1960年代

に入ると農地開拓事業が進められるようになり、湿地の大部分は水田化された。その後、埋め立ても始まり、宅地化と工場地化が急速に進み、環境が激変し、食虫植物などの湿生植物は絶滅に瀕するようになっていった。ここでは、保全活動と開発に伴う移植とその後の管理、現状について総括した。

湿地植物群落保全の動きは、1970年以降、当時長生中学校の教諭（後に校長）だった御園勇先生が中心になって進められた。その概略は以下のとおりである。1971年 長生村食虫植物等保護委員会（御園ほか5名）が発足した。

1973年 現在の尼ヶ台総合公園付近に食虫植物8種を移植した。

1974年 藪塚地区で千葉県自然環境保全地域のための学術調査（生嶋・御園）。これを受けて8haが保全予定地に指定された。その後、予定地が工場団地に編入された。

1981年 保護委員会によって藪塚地区の調査記録が出された。

1989年 千葉県自然環境保全変遷調査（福嶋・高見）。食虫植物はほとんど消滅状態であることが判明した。

1992年 谷城・岩瀬が藪塚の工場用地内に湿生植物が豊かな場所を発見し、調査を行い、千葉県並びに長生村に報告する。ここは埋め立て予定地であった。

1993年 長生村から埋め立て計画の延期要請が出された。村の委嘱により長生村湿地生態調査団（代表：福嶋司東京農工大学教授）を組織し、調査と群落移植のための実験を開始した。移植地は尼ヶ台総合公園内の湿地に決った。

1993年～ 群落ブロックによる移植、表土の移転作業を開始した。

1998年 種の供給源だった群落地は埋め立てによりほぼ消滅した。

移植地の湿生植物群落の保全管理や活動などは主に以下のとおりである。

1998年～ 毎年の定期管理、群落の調査、冬季の全面刈り取り、夏季の大型草本の抑制。

2001年 ガイドブック「未来につなごう・湿地の自然」（長生村）を刊行。

2003年～現在 地元ボランティア組織を結成し、調査・保全管理を協力、研修観察会を年3回、全面刈り取り作業を年1回行っている。

れる。特に、近年の開発に伴う水位の低下と水質の富栄養化は大きな脅威となっている。水分環境を抜本に解決するためには、大規模な土木工事や広域的な対策が必須であることなどが討論された。また、植生管理では、遷移の進行を遅らせるために、表土のはぎ取りや攪乱、大型草本の除去などの様々な作業が行われているが、生育場所の管理と各種の保護の両面から進めることの難しさが討論された。改めて、多様な生育環境を整え、保護する対象や将来構想を明確にすることが重要であると確認された。最後に、教育普及活動の大切さが再認識され、副読本の出版が要望された。

総合討論要旨

古木 達郎（千葉県立中央博物館）

話題提供された「成東・東金食虫植物群落」と「長生村尼ヶ台総合公園湿生植物園」における問題点の多くは、生育地における水分条件と植生の管理に集約さ